

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	吉原 永貴
論文担当者	主査 小柴 賢洋
	副査 坂口 太一
	副査 山門 亨一郎
学位論文名	Asymmetric Bifurcation Angle of Common Iliac Artery is
	Associated with Unilateral Calcified Nodule
	(腸骨動脈分岐角度と総腸骨動脈病変の関係について)
論文審査の結果の要旨	
<p>動脈のアテローム硬化性変化は特定の領域に形成されるが、その発生原因として全身性の動脈硬化危険因子以外に血管内皮上に血流によって生成されるずり応力や摩擦が影響する。腸骨動脈はアテローム性動脈硬化の好発部位だがその病態形成と解剖学的素因の関連は不明である。学位申請者は大動脈終末から総腸骨動脈にかけての解剖学的素因が腸骨動脈のアテローム硬化性変化に及ぼす影響を後向きに検討した。</p> <p>研究では2012年4月から2017年3月の5年間に新規の総腸骨動脈アテローム性動脈硬化狭窄病変に対して血管内治療を行った閉塞性動脈硬化症の患者72人を後向きに検討した。下肢動脈造影で大動脈に対する左右の腸骨動脈の分岐角度を各々測定し、その角度の差(Δ angle)を算出した。さらに、患者をΔ angleの中央値(7.8°)に基づき、Δ angle < 中央値の symmetry group と Δ angle \geq 中央値の asymmetry group の2グループに分けた。次いで、総腸骨動脈のアテローム性動脈硬化病変の分布と形態を下肢動脈造影および血管内超音波で評価し解析した。</p> <p>その結果、symmetry group の多くでは両側の総腸骨動脈に、asymmetry group の多くでは片側の総腸骨動脈にアテローム性動脈硬化病変を有していた。また、アテローム性動脈硬化病変の一種である石灰化結節は、asymmetry group でより多く観察された(28% vs 5%, $p < 0.05$)。これらの結果から、腸骨動脈の左右非対称分岐は片側性アテローム性動脈硬化病変、特に石灰化結節と関連し、大動脈終末から総腸骨動脈にかけての解剖学的素因が総腸骨動脈のアテローム性動脈硬化病変の形成に影響する可能性が示唆された。</p> <p>申請者が本研究において示した内容は、アテローム性動脈硬化の発症に関する重要な臨床的知見であると考えられ、学位授与に値すると評価した。</p>	